

穢れなき、残酷

いちばん美しい年令

Le plus bel âge...

ぼくは二十歳だった。それがひとの一生でいちばん美しい年令だなどと、だれにも言わせまい
——ポール・ニザン著「アデン アラビアより」



監督・製作＝ディディエ・オードパン

出演＝エロディー・ブシェズ／メルヴィル・ブポー／ガエル・モレル／ソフィー・オーブリー

1994年 フランス映画 カラー 1時間25分 配給＝ユーロスペース

1995年カンヌ国際映画祭“ある視点”出品作品

いちばん美しい年令

Le plus bel âge...

1995年カンヌ国際映画祭“ある視点”出品作品

監督・製作=ティティエ・オードバン

出演=エロディー・ブシェズ/メルヴィル・ブポー/ガエル・モレル/ソフィー・オーブリー

1994年 フランス映画 カラー 1時間25分

配給=ユーロスペース

青春の姿

佐浦文香

さうら あやか/作家・高校生

さうら あやか●作家。1979年生まれ。小説「手紙」で新潮新人賞受賞。現在は盛岡市内の高校に通う。

十七歳という時代の“不幸”

♥——十七歳! あなたはしあわせていなければならない——

♥これはフランスの詩人ジャン=アルチュール・ランボオの詩の一節だ。私は彼の詩を熱烈に愛する者の一人だが、それを誰かに話すことはほとんどない。彼の名を知る人は多いが、彼の詩を愛する人はごく少数しかいないというのがその理由だ。彼の詩は、痛くて、強く、そして美しい。私が思うに、思春期というものを表現する時、ランボオの詩以上に相応しいものは滅多にないだろう。十七歳がいちばん美しい年令になってくれない悲しみが、ランボオの詩からは伝わってくる。

♥“十七歳”という時代は、むしろ不幸である。それまで見える全ての景色をヴェールのように



覆っていた憧れや理想が、ぼろぼろと脆く崩れ始め、その陰から覗ける暗い世界を初めて目にする時代だからだ。勿論、ここでいう十七歳というのは具体的な年令を指すのではなく、もっと広い意味としての思春期を指しているのだと思って欲しい。固く信じていたものが、本当は全く違ったものだったとわかった時、そこには絶望とはもっと違う——とても冷たい冷気が心に入り込んで一瞬びっくりする程ヒヤリとしたかと思うと、突然妙に冷静に構えて目を細めながら、「ああ、やっぱりそうだったんだ」と冷めた口調で唾を吐くような——そう、これが絶望なんかよりもうんとたちの悪い“虚無”である。人は思春期になって初めて虚無の存在を、身を持って知るのではないだろうか。理想や憧れを否定したくなくても、そうしなければ前に進めないことへの痛み。それを知る時代を不幸と言わずに何と言うのか。

痛みを背負う美しい人

♥『いちばん美しい年令(とし)』——この映画は痛い映画である。多感な若者たちの最も醜く、だが決して否定できない姿がそこにある。少女はコンプレックスに悩み、少年はエゴイズムで自分を隠すことに必死になっている。彼らは未来から目を離すことが許されないから、逃げ道を探すかわりに救いを求めて、傷だらけの体を引きずっているのだ。

♥私はいま、十八歳を生きているから、こういう思春期の痛みをリアルタイムで感じている。私は勉強ができないし、うまく歌も歌えない。人より美しいわけでもないし、運動もできない。明るくもなければ、誰ともすぐに親しく付き合えるわけでもない。文を書くことを取柄にしていた時期もあったけれど、うっかり本を出してしまったから、自信もなくなってしまった。人と愛し合うことも知っていたけれど、それが必ずしも幸福に結びつくわけ



じゃないだなんて、ちっともわからなかった。一步一步確かに歩いているのか、脆くて柔らかくてすぐに崩れてしまうものを選んだりしてしまったんじゃないかどうか、何も分らないのだ。

♥だが、ランボオは言う、「十七歳! あなたはしあわせていなければならない」と。自分に対してのコンプレックスや、未来の不安があったのかどうかは全くわからない。それでも彼は、思春期が不幸な時代であるを知っていた。そうじゃなければこんな言葉は決して浮かんでほかないだろう。まるで水底を見せる海面のように、底に沈澱する痛みを映し出しているのではないか。

♥私がこの詩を口づさむ時、叫びたいほどの痛みを背負いながらも微笑みを絶やさない美しい人の姿を見るようで、涙が出そうになる。そしてその美しい人とは、まさしく青春というそれであり、その時代に生きる若者たちのことにほかならないのだ。自分も含めて。

ものがたり

♥2時間前に図書館で知り合った、知的で美しい上級生が階段の踊り場から飛び降りて死んだ。クロードという名の彼女にいったい何が起きたのか? パリの名門リセに通う十七歳のデルフィース(エロディー・ブシェズ)の心は揺れ動く。クロードの面影を追って、その恋人だったアクセル(メルヴィル・ブポー)に恋心を抱き、彼の言葉に従ってクロードの弟を抱かれるデルフィース。激情の日々の果ての、早熟で、あまりにも残酷な結末とは……。

3/21土 ~ 4/3金 ロードショー

11:30/1:15/3:00/4:45/6:30

前売一般=1,400円 (当日一般=1,700円 当日学生=1,400円)

ホワイティ泉の広場上がる 東へ5分
扇田ミュージアムスクエア
06・361・0088